

2020年度学生委員会報告書

公益財団法人 日本財団学生ボランティアセンター

2020年度学生委員会

I. 学生委員会の目的

学生委員会（以下、「委員会」という。）は、公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター（以下、「センター」という。）定款第45条の規定による専門委員会として、学生の様々な意見を取り入れるために設置している（規14号 第1条）。センター事業に関する助言又は提案を任務としている（同第2条）。

II. 学生委員

本年度の学生委員（以下、「委員」という。）は、2020年6月8日に行われた第19回理事会において選任された。委員は6名で、センター実習生、地方大学在籍者、留学生、センター事業参加者、ボランティア活動に従事している者などから構成された。委員の選任理由は以下の通りである。

・加藤 小凜

（常葉大学健康プロデュース学部3年／ボランティア活動に従事している者）
常葉大学のボランティアサークルThunder Birdsの代表を務め、災害支援から地域のイベント運営ボランティア、防災、子ども、スポーツ、学校など活動は多岐にわたる。また、いじめや不登校などの課題に対する子どものコミュニケーションスキル向上のための支援や障がいのある方への支援など、他団体の活動にも積極的に参加している。中部地方の学生として、またボランティアに関心がある学生のニーズや動向についての情報が期待できるため。

・玉之内 菖

（聖学院大学心理福祉学部3年／ボランティア活動に従事している者/センター実習生） *委員長
聖学院大学復興支援ボランティアチームSAVEの代表として、岩手県釜石市にて活動を継続している。また、東日本大震災の「風化防止の為の伝承活動」や防災に意識を持ってもらうため、学校や防災学習センターなどで「防災戦隊マモルンジャー」としてショーも実施。センター職員が行う大学の授業を始め、センター事業にも積極的に参加しており、大学数の多い関東地方の学生として、また本人に学生委員を希望する強い意思があり、委員長としての活躍も期待できるため。

・永田 侑大

（芦屋大学大学院教育学研究科修士1年／地方大学在籍者／ボランティア活動に従事している者）
独立行政法人 国立青少年教育振興機構の法人ボランティアとして、小学生以下の子どもとその家族を対象としたプログラムに参加している。また、文部科学

省主催 日独学生青年リーダー交流事業に参加し、ボランティア団体等の訪問、合宿セミナー、ホームステイ、学習成果発表などを経験。今年度より高等学校の非常勤講師も務めており、また全国学生ボランティアフォーラムでは運営側としても参加経験があるなど、大学数の多い関西地方の学生として、教育者として、また企画運営側としての意見が期待できるため。

・野村 俊介

(東北大学工学部3年/地方大学在籍者/センター事業参加者/ボランティア活動に従事している者)

東北大学課外・ボランティア活動支援センターのボランティア支援学生スタッフ SCRUMに所属。震災伝承部の元代表。防災・減災をテーマとしたスタディーツアーなども企画、運営している。災害支援も積極的に行っており、昨年度は台風19号で被災した宮城県伊具郡丸森町にて、センターの派遣参加を含め40回近く活動した。東北地方の学生として、またボランティアに関心がある学生のニーズや動向についての情報が期待できるため。

・ペギー ペルマタサリ

(東京外国語大学国際日本学部2年/留学生/センター事業参加者)

インドネシア出身であり、インドネシアではイベントや学校行事の運営をボランティアで行っていた。また、昨年度はセンターのチーム「ながぐつ」プロジェクトにも参加し、福島県の被災地視察や災害支援、農家支援を行った。センター事業参加者として、大学数の多い関東地方の学生として、また留学生として、文化の宗教観も含めた意見が期待できるため。

・美坐 友里菜

(熊本大学文学部2年/地方大学在籍者/センター事業参加者)

高校卒業までの18年間を鹿児島県の離島である種子島にて過ごす。島の現実として少子高齢化や過疎化が進み、島内の小学校も廃校となっていく中で、自分の地元をどうすればこの先も持続可能な島にしていけるのか、というテーマで様々な取り組みを行っている。また、プラチナ「森の学校・きくち」へも学生チューターとして参加した。九州地方の学生として、またセンター事業参加者としての視点から意見が期待できるため。

Ⅲ. 開催概要

開催の日時・場所を委員会で検討の結果、センターとオンラインにて委員会を4回開催した。

第1回委員会

日 時：2020年6月20日（土）20：00～23：00
場 所：オンライン（Zoom）
参 加 者：委員6名、職員1名
議事要旨：

- ・委員へのセンター設立趣旨・事業概要説明と質疑応答
- ・各委員より自己紹介（ボランティア活動を行う動機を含む）
- ・学んでいる専攻やそこから見えてくる社会課題を共有し、今後のテーマ決め

第2回委員会

日 時：2020年8月8日（土）10：00～12：10
場 所：センター7階事務所、オンライン（Zoom）
参 加 者：委員6名、職員1名
議事要旨：

- ・コロナ禍で顕在化した課題についての意見交換
- ・理事会への提案に向けたスケジュールの確認
- ・次回の開催場所と内容について意見交換

第3回委員会

日 時：2020年12月13日（日）13：00～15：00
場 所：オンライン（Zoom）
参 加 者：委員6名、職員1名
議事要旨：

- ・センター事業へ参加後の意見交換
- ・センターへの提案内容についての意見交換
- ・次回の開催場所と内容について意見交換

第4回委員会

日 時：2021年2月22日（月）13：00～15：00
場 所：オンライン（Zoom）
参 加 者：委員6名、職員1名
議事要旨：

- ・センターへの提案内容の決定

IV. センター 事業への提案 及び意見

本年度はコロナ禍において生じた課題の中で、委員がそれぞれの活動で特に感じている課題に対してセンターに期待する提案や意見について議論した。また、委員が参加したセンター事業についても同様に、参加して感じた課題点や改善案を議論した。以下の提案及び意見には、来年度からの反映が難しいこともあるだろうが、検討を願う。

1. 学生団体における課題について

(1) 現状・経緯

本年度は、コロナ禍により災害支援等を行う組織においては活動の休止、小規模化やオンライン化など、これまでとは異なる支援の形を求められることとなった。

学生団体においては、委員の知るほとんどの団体が大学の方針により対面による活動が休止となった。秋以降、地方大学を中心に一時的に活動が再開されたものの、冬の感染再拡大を受け再び活動が困難となった。特殊な状況下において様々な課題や困難が生じ、疲弊や離脱をしてしまう学生も多く見受けられるのが現状である。

本年度の学生委員会には、東日本大震災被災地での復興支援や水害等の災害復旧支援を経験したことがある委員がおり、同時に学生ボランティア団体の幹部を務めている委員も多い。コロナ禍における災害救援の課題について議論をしていく中で、学生団体の様々な課題や各委員の抱える苦しみが見えられた。上記を踏まえ、学生団体における課題が山積みであるという共通認識であったことが、この議題に至った経緯である。

(2) 課題

これまで行ってきた対面での活動ができなくなり、現地との対人関係性が弱まった。新しい活動を模索するもどこか意義を見つけかねている場合も多く、想いが形に出来ないもどかしさなどに起因する団体内のモチベーション格差や、コロナ禍のリスクに対する考え方の差などに起因する組織内の分断が生じた。団体メンバー同士が会うこともできず人間関係が希薄になり、後輩育成なども思うように進んでいない。これだけの課題と向きあわざるを得ず、組織の存続に対して責任感をもってきたメンバーは現状に悔しさや罪悪感を抱えている。活動は消えても組織でのタスクは消えず、参加しなくなったメンバーの補填や先輩達が積み上げてきたもの、さらには様々な外部からの声を背負い、心身共に疲弊する中で悩みを抱えている。

(3) 意見・提案

現状これらの課題に対する根本的な解決は、学生たちが本来望むような活動を望む形で実現することでしか成し遂げられないように感じる。解決が難しいとしても、こういった課題の認知を広めて共有し、皆で改善を模索していくことは現状の改善につながるはずである。様々な活動で言えることだが、コロナ禍において団体や活動に手助けできる存在、学生と大学の間や学生と現地の間に入り両者のギャップを埋める役割が必要だと考え、その役目をセンターのような学生ボランティアを支援する組織が担うことを提案とする。

2. オンライン版チーム「ながぐつ」プロジェクト福島 第4回に参加して

(1) 現状・経緯

2011年の東日本大震災を契機に、2013年から続けているいわき市への学生ボランティア派遣のチーム「ながぐつ」プロジェクトであるが、コロナ禍により2020年3月以降は活動ができていないため、学生と現地の方々との繋がりをつくる機会をオンラインで設けている。コロナ禍で新たな試みとなったオンライン版ながぐつに学生委員として参加した。

(2) 課題

- ①文面のみのご案内だったことにより、センター事業に初めて参加する学生には「ながぐつ」プロジェクトのイメージがしづらかったため、参加者が少なかった回があったと感じる。
- ②SNSの発信を利用して、現地農家の商品を知ってもらうというアクションを起こしているが、各自のSNSで発信するだけで終わってしまい、その後の影響や成果等のフィードバックが参加学生に対して無く、達成感に繋がりづらい。

(3) 意見・提案

- ①募集時点で、センターの概要や「ながぐつ」プロジェクトの現在に至る経緯、参加するゲストの紹介、当日の概要について、より詳しく説明した文章を追加する。
- ②現地農家の売上等に影響があったのかを事後に確認することや、農家の方からSNS発信後の影響やプロジェクト等のフィードバックを受けることで、参加学生も発信したことの意義を実感できるのではないかな。

3. コロナ禍における子どもたちの現状について

(1) 現状・経緯

コロナ禍により、子ども達の生活にも至るところで影響が出ている。家庭内感染を避けるために学校に登校できていない子どもや休校措置が取られる度に、子どもの勉強の見守りをはじめ昼食の準備など、親も子もストレスを抱えてい

るという現状がある。児童虐待の相談件数は、1990年度の統計開始以来、過去最多となった（2020年11月 厚労省発表）。今回、学生委員会では、義務教育までの子ども達に焦点を当てて現状について考えてきた。しかし、子どもに関わるボランティア活動をしている委員や大学で児童福祉を専攻していて実際に現場での実習を経験した委員が複数いたことから、義務教育までの子どもに限らず課題等は存在しているという意見があがり、この議題に至った。

(2) 課題

親も子どももストレスを抱えているという現状があり、このような状況の中でもコロナ禍の収束が見えず、子どもやその親にかかる負担もだんだんと大きくなっている。また、児童福祉施設の実習を経験した委員もおり、実習を通して施設等でも現役の学生が関わることによって、子ども達が学習の相談等をしやすくなるのではないかと、日常業務に忙殺されている職員の負担を軽減することができるのではないかと考え、学習支援にニーズがあると感じた。コロナ禍での外出自粛等に伴い、支援すべき対象が潜在化していて見えづらく分かりにくい状況になってしまっていることも課題だと考えた。

(3) 意見・提案

上記の課題より、学校に行けずストレスを抱えている子どもの、家と学校以外の拠りどころ作りの支援をはじめ、学習支援の面でもニーズを感じたことから子ども達と年齢が近い学生ボランティアの存在が必要になってくるのではないかと考えた。

そこで、日本財団の「子ども第三の居場所」プロジェクトと協力して、学生ボランティアがオンラインで子どもたちの話し相手や学習支援の力になれないだろうかと考え、これを提案する。感染リスクも回避することができる他、コロナ禍の収束が見えた後でも、子どもや親、施設職員等の負担を少しでも減らすことができると思われる。

V. まとめ

委員は、4回の委員会を中心に意見交換を行い、委員会として本報告書をまとめた。それぞれが経験してきた活動や関心のある社会課題に焦点を当て、コロナ禍という状況下で見えてきた課題について主に議論を始めた。議論していく中で気づいた課題や委員の経験によって得た気づきから課題は変化していき、意見・提案はより具体的なものとなった。

ここでの意見・提案を全て行うことは難しいかもしれないが、来年度以降の事業で1つでも多く展開されることを期待して、本報告書のまとめとする。